

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

新年も、“共に生きる” 希望の年とできますように

仙台教区サポートセンター長 平賀 徹夫 司教

東日本大震災から丸4年となる年、2015年を迎えました。新年をお迎えになるにあたり、被災された方々は少しでも元気や明るさを取り戻されたでしょうか。支援にお力添えくださる方々も思いや気力も新たに新年をお迎えでしたでしょうか。昨年は皆で心を合わせ、力を合わせて過ごす一年とできたと思います。どうもありがとうございました。この新しい一年も、希望を失わず“共に生きる”年とすることができたらと望んでおります。どうぞよろしくお願い申し上げます。



人間の世の中には確実だと言えることがどれだけあるものでしょう。計画したことがその通りに進めば本当に結構なことです。しかし、きつとうまくいく、大丈夫だ、と思った計画が遅れに遅れたり、思いもよらない行き詰まりを見たり、あるいは頓挫してやり直さねばならないことになったり、などはよく経験することです。今までの3年9カ月の被災地復興の情勢はこのようなことだらけではなかったでしょうか。でも、辛い・苦しい・悲しい思いの連続の日々ながら、それを乗り越えてきました。どうしてできたのでしょうか。それは人と人との「絆」の価値が共有されてきたことによるのではないかと思います。大震災直後には「絆」ということばが耳障りなくらい頻繁に飛び交いましたが、最近はほとんど聞こえなくなったようです。窮屈な緊急避難所に大勢の被災された方々が身を寄せたとき、お互い自然に気遣い合うことで実感した「絆」。仮設住宅団地に入れたとき、立ち上げには苦労はしたものの自治会を組んで声を交わし合って確認した「絆」。それが少しずつバラバラに復興住宅に移ることができるようになって薄れてきた「絆」ということでしょうか。耳には聞こえなくなったとしても、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう（創世記2・18）」という神さまの思いに応え、互いに大切にしようという心を失いたくないなあ、と思います。

昨年12月半ば、カトリック社会司教委員会主催の「司教のための社会問題研修会」に参加し、福島市から原発周辺の浜通りを巡りました。JR富岡駅付近は放射線量のせいでしょうが、2011年3月11日そのままに、駅舎も家々も軒並み壊れ、何台もの自動車も転がって放置されている光景には心が痛みました。この被災者は中通りの仮設などに避難しておられるのでしょうか。故郷に戻る日が来るのでしょうか。帰り道、南相馬市小高区の同慶寺に立ち寄ってご住職のお話をお聞きしましたが、被災して遠方に避難された檀家の方々が毎月、距離をものともせず集まってきてお寺の清掃をしているとのことでした。「絆」によって生きていることのあかしであろうと思います。

かくして、新しい年が始まりました。被災された方々、復興のためにご尽力くださる方々、皆さまの上に、神様からの祝福・ご加護が豊かに注がれますようにお祈りいたします。

子どものためのクリスマス会

カリタス大槌ベース 西館 さつき

2013年に引き続き、カリタス大槌ベース主催の子どものためのクリスマス会を2014年は大槌町子どもセンターをお借りし、12月23日(火)に開催しました。

子どもセンターでは、放課後の小学生の預かりを行っており、勉強や遊びだけでなく子どもたちの発表の場やバイオリン教室など、子どもを中心とした活動も行っています。子どもセンター側としては、他団体のために場所を提供することはありませんでしたが、カリタスが主催ならばと特別に会場を提供してくださいました。

小学生とその保護者・兄弟を対象に、大槌・吉里吉里小学校にチラシを配布し、子どもが行きやすい場所ということ、当日大槌小学校の終業式ということもあり、昨年より多くの方々に参加していただきました(計45人)。

クリスマス会は10時から始まり、ボランティアには受付・クリスマススクイズ・見守りなどをしていただきました。子どもたちには1人500円程度のプレゼントを持参してもらい、それを受付で回収し、ボランティアが中に入った大槌町のマスコットキャラクター、“おおちゃん”とサンタ役のボランティアと一緒に子どもたちに渡しました。

子どもたちはみんな大喜びでおおちゃんに抱きつき、潰れてしまいそうなほどでした。プレゼントを1人1人受け取り、一緒に写真撮影会を行いました。皆さんからたくさんの笑顔をいただきました。



子どもたちに大人気のマスコットキャラクター★おおちゃん★

子どもの出し物として、仮設住宅で和太鼓をしている10人の子どもの演奏が行われました。指導者は大槌町の伝統音楽“城山ばやし”の作曲者の男性でした。演目は城山ばやし・甚句の2曲で、甚句では飛び入りで大人の方と私が踊らせていただきました。同じ甚句でも舞いは大槌と吉里吉里では微妙に異なるので、少々ぎこちない舞いとなりました。演奏した子どもたちは、今回のような発表の場が

なかなか無かったとのことで、最初は緊張した様子でしたが、何度も演奏するうちに笑顔が見られ、続いて行われた和太鼓体験では他の子どもたちに叩き方を教えていました。

また、大槌の伝統芸能“金澤神楽とりっこ舞い”の披露も行われました。笛・太鼓・踊り子の10人の演舞は、地元の方でも大槌祭り以外で見ることはないの、皆見入っていました。私も毎年お祭りに参加する側なので今回のようにじっくり見たのは初めてでしたが、改めて郷土芸能は素晴らしいと感じました。



昼食は町内の商店でオードブル（やはた）・ケーキ（エルマーノ）を用意しました。やはり地元の味は馴染みがある、ほっとする温かな気持ちにさせてくれます。

ボランティアによるクリスマスクイズも行われ、トナカイに名前があるなど日本とは一味違うアメリカのクリスマスのことも楽しめました。

帰り際、子どもたちはおおちゃんからのプレゼントとサダナさんのクッキー、カリタスからのお土産を両手いっぱい持って笑顔で帰っていきました。今後も季節のイベントのみならず、学習・遊び場などいろいろな場面で子どもたちの成長を見守りつつ、お互いが楽しく関わり、絆を深めていけたらと思います。

「サンタが町にやってくる！」

カリタス大船渡ベース 深堀 崇

2014年12月21日(日)、第2回となる「サンタが町にやってくる！」(略称：サンマチ)というイベントが開催されました。昨年からは、大船渡市の地元の青年の力で大船渡市の冬の名物詩を作っているという開催されているイベントです。冬の名物となるイベントを、そして何より子どもたちに笑顔届けようと企画され運営されています。

大船渡市をはじめ東日本大震災で津波の浸水をした地域の子どもたちは、自分たちが通う学校の校庭に仮設住宅が今なお建っているのが



現状です。2011年に中学1年生になった学生は、今年自分たちの学校の校庭で部活や運動会をすることなく旅立っていきます。

小学生も同様で、自分たちの校庭で遊ぶことができず、浸水により遊ぶ場所もなくなってしまい、家の中など室内で

遊ぶことが多くなっています。そんな子どもたちに笑顔とプレゼントを届けようと開催されたのが始まりでした。

2014年のサンマチの準備は、5月から始まりました。はじめは2013年からの引き継ぎで協力してくださる方のみでの会議でしたが、徐々にその輪が広がっていき、イベント開催直前には実行委員だけで20名を超える人数になりました。2013年との大きな違いは、半数が外部から来た人だった実行委員会が、今回は、外部からの人は三分の一まで減り残りの三分の二は地元の人が実行委員をしているところが2014年の大きな進歩でした。

2014年のサンマチは、早い段階から動くことができたので、サンタ役を担うボランティアへの声掛けもうまくいきました。100人くればよいかなと思っていたサンタも、蓋を開けてみると170人まで人が集まりました。ほとんどが大学生で、学校だけでも9校の大学から学生が集まってサンマチを盛り上げてくれました。

イベントは、メイン会場でのステージやワークショップ・地元飲食店による出店とサンタウォークとして市内を9コースに分かれてのサブ会場での子どもたちと遊ぶ時間やプレゼント配布と盛りだくさんの内容でした。

メイン会場では、気仙沼の地元アイドル「SCK GIRLS」や大船渡出身の歌手「LAWBLOW」のライブがあったり、子どもたちが自由にお絵かきのできるスペース「サンマクロースの家」や大船渡東高校のボランティアサークルによるワークショップなど子どもたちがいつでも安全に遊べる場所を作っていました。



メイン会場にはトータルすると1,500人近い親子連れが来てくださり、準備していたプレゼントを喜んでもらっていってくれました。メイン会場の外のJR盛(さかり)駅内では、地元高校生有志による一日限定のカフェがOPENしていました。高校生が地元のカフェと協力して本格的なコーヒーの提供に挑戦していました。なかなか普段できない体験に、高校生は10月から準備を進めて本番を迎えていました。

サンタウォークでは、子どもたちと触れ合う時間を多くとっていたので、サンタも子どもと一緒にしゃいで走り回っていました。各公民館などをサブ会場に借りていたの、地域の子どもたちが多く来てくれました。メイン会場には遠くて行けないけど、サンタウォークがあってよかったとの声も聞きました。

今回も、多くの子どもたちの笑顔に出会いました。来年も継続して開催されると思います。皆さんも、子どもたちの笑顔も見て、大船渡の復興状況を見に来ませんか？



仙塩地区連合婦人会「あけの星会」 南三陸町支援活動

あけの星会支援担当 東仙台教会 阿部 正子

仙塩地区連合婦人会「あけの星会」の被災地支援活動の始まりは、2011年5月でした。きっかけは、西仙台教会の宇津木さつきさんから、ドミニコ会のシスター安藤からの情報として、気仙沼カトリック幼稚園長の会津隆司神父様が瓦礫埃から園児たちの身を守るためのマスクを求めておられるということを聞いたことです。

始まりは幼稚園児の支援から

私たちはすぐ、会津神父様と連絡を取りました。園児たちが瓦礫埃で困っているのは、気仙沼だけではない、ということを知りました。そこで、宮古・気仙沼・石巻・大船渡の4か所のカトリック幼稚園に早速マスクを送りました。

この支援活動を始めてから、私たちがしみじみ感じ、心から感謝していることは、神様は、必ずなんとかしてくださる、という御摂理に対する信頼と、神は被災され困っている方々を、見捨ててはおられないという強い確信をもって活動が続けることができるということです。各小教区における女性たちの支援活動と共に、仙塩地区連合としても力を合わせて働けることに主のお導きを感じます。

これは、最初にマスクを送るときから始まりました。お金が必要です。限られた予算で活動している「あけの星会」にとって、予算外のマスク代金7万円に困っているとき、カトリック東仙台教会婦人部が協力してくださり、支払うことができました。

今回のマスク代をどうするかと思案しているとき、韓国ソウルカトリック女性の会より、438,009円の献金が平賀徹夫司教様を通してあけの星会へ届きました。これは、2008年の日本カトリック女性団体連盟の仙台総会の折、テレサ・オー世界カトリック女性連盟副会長がご出席くださり、同年にソウル市で開催されたアジア太平洋地域会議に仙台からはあけの星会指導司祭の佐々木博神父様と私が参加し、ソウルのカトリック女性の会の方々と親交が深まっていたとはいえ、思いがけない韓国の姉妹たちの温かいご支援に、会員一同、神様のお計らいを強く感じるとともに、心から感謝したのでした。

以来、会津神父様と相談しながら幼稚園で当時必要な大型扇風機・殺虫剤・マスク等を支援することができました。

さらに、私たちの活動を知った友人の東京教区・調布教会の女性が「被災地とつながる会」を立ち上げ、活動資金を応援くださり、溝部脩司教様が調布教会に行かれたとき、「あけの星会」の永年にわたる活動をご紹介くださったことで、調布教会からも現在に至るまでたくさんの支援を続けて頂いています。また、日力連に加盟なさっている各団体や個人でも多くの方々が祈りと共に活動を応援くださっています。すべてに感謝し、共に歩むネットワークの大切さを改めて感じております。

フィリピン女性の方々への支援へと広がる

東日本大震災によって沿岸部にも多くのフィリピンの女性の方が住んでおられることがわかりました。

10月に入り、会津神父様より南三陸町の佐々木アメリカさんをご紹介いただきました。仮設住宅に住む方々のための電気毛布・湯たんぽ・炊飯器・ファンヒーター・靴下・子ども服・ミシンなどの希望を電話でお聞きしながら支援を進めました。

仙台・塩釜地区のカトリック教会に所属している私たちは、程度の差こそあれ、全員なんらかの被災を受けています。自分たちの教会や



第62号 2015年1月1日
家を片づけながらの支援活動のため、遅くなってしまいましたが、11月になって「あけの星会」役員で初めて南三陸町を訪ねました。一変した町の状況を目の当たりにし涙するのみでした。そのときはじめてアメリカさんと会い、今後の支援を話し合いました。こうして、以後、2ヵ月毎の米90kg、11月～3月には貼るカイロを、年2回の石巻市の山形屋商店の味噌・醤油・甘酢等を贈り続けております。この山形屋商店さんは、石巻で津波被害にあい、すべてを失われたのですが、カリタス石巻ベースのボランティアさんたちが、工場の泥出し、瓦礫の片づけなどを手伝い、そこから立ち上がられました。同業の被災していない工場の1部を借りての再出発を果たされました。ここで作られた味噌、醤油、甘酢などを買い求めることは、山形屋商店の復興のためにも、フィリピンの家族を助けることにもなるという一石二鳥の支援活動です。(山形屋商店についても会津神父様の紹介です。現在も全国各地の姉妹たちが商品購買の協力を続けてくださっています。)



また、被災地司牧に入られた淳心会のギャリー神父様とシスターの活動のために献金させていただくとともに、月1度アメリカさん宅で開かれるミサのためにキーボードを贈りました。会津神父様より時折送られてくるミサの様子や、明るい笑顔の姉妹たちやご家族の画像を拝見しながら、私たちは主のもとにひとつと深く感じます。昨年のカトリック宮城県大会で南三陸の姉妹方とお会いした時、海で働くので貼るカイロが嬉しいと笑顔でお話しくいただきました。

各地からの支援仲間と一緒に南三陸町を訪問し、被災地の状況に驚きながらも、前向きなアメリカさんのお話や行動に、かえって元気を頂いて帰られます。英語教師、福祉活動、同胞の介護ヘルパー取得のための支援と細い体にエネルギーを感じます。彼女は私に言いました。「振り返るより、前を向いていたい」と。まだまだ「あけの星会」の南三陸町支援は続きます。

2015年の平賀司教様の年頭書簡で何度も提示されている「希望」のことばをしっかりと心に留めながら、それぞれが神様からいただいている命を大切に生き、共にまた一歩と主の道を歩いてまいりたいと思います。



調布教会「被災地とつながる会」 アメリカさんを訪ねて

【ボランティア募集中】

毎年1月から2月にかけて、ボランティアが激減しております。仮設住宅のお茶っこなど被災地での支援活動は、季節を問わず行っております。皆様のご協力をお待ちしております。

どうぞよろしくお願いいたします。

◎お申し込み方法などは、各ベースのブログやホームページ、カリタスジャパンブログ(<http://caritasjapan.jugem.jp/>)をご覧ください。